

原 著

子どもの他者に対して見ることを求める呼びかけについての一考察 —ある女兒の他者との位置関係への気づきと自己の意識に着目して—

中島 寿子

＜要 旨＞

保育所1・2歳児クラスで1年間の参加観察を行ない、子どもが他者に対して見ることを求める呼びかけの事例を収集した。今回はその中から一人の女兒の事例を取り上げた。そして、これらの事例には他者との位置関係が違う「並ぶ関係」を求める呼びかけと「提示の関係」を求める呼びかけがあることに着目し、この二つの場合の呼びかけがどのように見られたか検討した。

その結果、始めは「並ぶ関係」を求める呼びかけが多く観察されたが、2歳を迎える頃から次第に「提示の関係」を求める呼びかけが様々な内容で多く観察されるようになって行った。

結果をもとに、二つの場合の呼びかけにおける他者との位置関係の違いへの気づきについて、その子どもの自己の意識のめばえとも関連させて考察した。

キーワード：他者に対して見ることを求める呼びかけ、保育所、1・2歳児クラス、自己の意識、参加観察

I 研究の目的

子どもたちと園生活を共にしていると、「みて」「みてて」等と呼びかけられることがよくあるが、このような子どもの行為についての研究に幼稚園児を対象とした福崎の研究がある。福崎はこのような呼びかけを「みてて」発話とし、収集した事例をもとに、「みてて」発話には保育者や友達の承認・賞賛や共感を求めたり、保育者に対する援助の要求や保育者を独占しようとする意図、友達に対する遊びの勧誘や遊具の交替、自己への激励等、様々な思いが込められていると考察している¹⁾。また、他児に見てもらおうことを意図して保育者や参加観察者に呼びかける場合²⁾や、参加観察者のありようや友達の特性を把握した上で、自分の思いを伝えるための道具的役割を持つ場合³⁾があることも指摘している。

以上のように先行研究では様々な考察が行なわれているが、このような呼びかけには二つの場合があることは考慮されていない。やまだは、0歳から3歳までの子どもを対象とした家庭での参加観察をもとに「ことばの生まれるすじみち」について考察した中で、他者に見てもらおうように働きかける行動には、指さしの

ように「並ぶ関係」を求める場合と「提示の関係」を意図する場合があり、この二つの場合では〔私〕と〔他者〕の位置関係も違うと指摘している(図1、図2参照)。そして、指さしや提示の段階では、まだこの方向性の相違はささやかなもので、乳児自身に意識されたものでもないが、人は自分と「私たち」という「並ぶ関係」をつくるのか、「私」を見る「観客」として機能するののかの亀裂は、1歳、2歳代において、〔私〕という自己の意識がめばえる頃には、はっきりしてくるであろうと述べている⁴⁾。

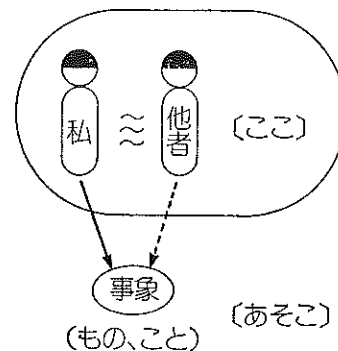


図1 「並ぶ関係」(やまだ, 1987)⁵⁾

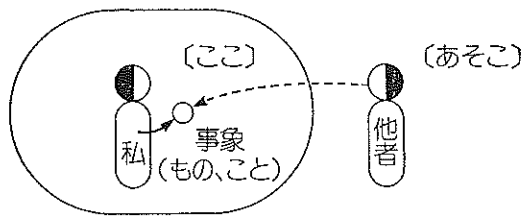


図2 「提示 (showing) の関係」(やまだ,1987) 6)

このように、やま達は他者に見てもらおうように働きかける行動には〔私〕と〔他者〕の位置関係が違う二つの場合があることと、この違いへの気づきと子どもの自己意識のめばえとの関連について指摘しているが、この点については以下の参加観察研究も参考となる。

阿部は保育所での参加観察をもとに子どもの自己の育ちについて考察しており、子どもたちは所有意識が芽生え、身体を所有するようになる1歳半頃から、思い入れのあるモノや自分の身体を操作することにこだわる(「自分で」を主張する)ようになり⁷⁾、2歳代から3歳代になると、この欲求(気持ち)、この身体、この物(お気に入りの玩具や自分の持ち物)、こうすること(行為)が他から区別された「一つのまとまり(自己の領域)」として意識されるようになると指摘している⁸⁾。そして、他者から見られることを意識した行動をとる2歳近くの子どもの姿を挙げ、「この視線の方向(向かう→向かわれる)の獲得は(中略)自己の境界、それを境にしてできる外側と内側のそれぞれに向かうことを可能にするもの」であり、「自分には属さない外側(もの<物質>と他者の気持ち)と自分に属する内側(自分の気持ち)に気づいていくための重要な機能の獲得ということにな」と述べている⁹⁾。

また、保育所での参加観察をもとに子どもの笑いについて考察している友定も、子どもの自己意識に関連した笑いの基本形のほとんどが2歳児クラス(2歳ちょうどから4歳直前まで)で出始め、それは「見られる自分に気づく」という形でまず表れると指摘している¹⁰⁾。

以上の研究成果をふまえ、筆者は子どもが「みて」「みてて」等と他者に呼びかける行為について、〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いを考慮し、子どもの自己意識のめばえとも関連させて考察して行きたいと考えた。そのため、「見られる自分」に気づき始めるとされる2歳前後からの子どもたちを対象とし、保育所で参加観察を行ない、子どもたちが保育者や友達に「みて」「みてて」等と呼びかける事例を収集した。そして、

まず他者が「私」を見る「観客」として機能する場合である「提示の関係」を意図する呼びかけ(このような呼びかけを「提示的呼びかけ」とした)を取り上げ、子どもたちがどのような場面でどのような相手に、どのようなモノや行為を見せようとするのか(このモノや行為を「提示的呼びかけの内容」とした)、そこには子どもたちの自己意識がどのように窺えるのか、一年間の園生活の流れもふまえて考察した。

その結果、筆者が対象とした子どもたちも、やはり様々な思いを込めて他者に呼びかけており、事例数にかなりの個人差があることも明らかとなった。提示的呼びかけの内容は大きく分けて15の内容に整理された。提示的呼びかけの内容によって呼びかける相手を選ぶ様子も窺え、保育者の願いや思いを子どもたちは感じとり、それに応えられる自分を見せようとしていた。そして、「見せたい自分」を見守ってもらうことが大きな支えとなっていた¹¹⁾。

次に、事例数が多かった4人の子どもの事例を取り上げ、提示的呼びかけの内容、その場面や相手、そこに込められた思いについて、一年間の園生活の流れの中でその子どもの自己意識とも関連させて考察した¹²⁾。その際には「自分のモノ」「自分のこと」という意識が感じられなかった「報告したいこと」の事例は省いて考察した。その結果、子どもたちの提示的呼びかけの内容には共通する部分とともにも個人差もあり、それぞれの子どもの特徴的な提示的呼びかけの内容からは、特にその子どもの自己意識を窺うことができた。

また、4人の中でもS子(事例収集開始時1歳9ヶ月)は1年間の園生活の中で特に大きな変化が見られた。提示的呼びかけの内容が始めはモノのみであったのが、2歳を過ぎた頃から次第に自分の行為についての内容が次々と現れ、「自分を見てもらいたい」という思いははっきりと感じとれるようになって行ったのである。このようなS子の変化は、S子の中に自己意識がはっきりしてきたことの表れと考えられた。

では、S子はやま達の指摘する〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いについてはどのように気づいて行ったのだろうか。筆者のこれまでの研究は提示的呼びかけのみに焦点を当てているため、この点については考察ができていない。そこで、本稿ではS子の「並ぶ関係」を求める呼びかけ(このような呼びかけを「指さし的呼びかけ」とする)の事例も取り上げ、1年間の園生活の中でS子に指さし的呼びかけと提示的呼びかけがどのように見られ、変化して行ったのかを検討することを

通して、S子が二つの呼びかけにおける〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いにどのように気づいていったのか、自己の意識のめばえとも関連させて考察することを目的とする。

II 方法

1. 対象児

北九州市内A保育所の2002年度1歳児クラス、2003年度2歳児クラスのS子。このクラスで対象とした子どもは、事例収集期間を通して在籍した男児11名、女児8名計19名^{注1)}であった。(このクラスの担任保育者は1歳児クラスから2歳児クラスへの移行時に4名中3名が入れ替わった。1歳児クラス担任をa先生、b先生、c先生、d先生、2歳児クラス担任をa先生、e先生、f先生、g先生とした。a先生は0歳児クラスから2歳児クラスまで担任であった。)

2. 事例収集の期間

2003年1-3月、4-6月、7-9月、10-12月に各11日、計44日。事例数とその内容等の変化について1年間の園生活の流れとも関連させて考察するため、1年を4期に分け、期ごとに事例収集の日数が同じになるようにした^{注2)}。

もともと、S子については欠席日があったため、事例収集の日数は1-3月と10-12月は各8日となり、計38日となった。

3. 事例収集の方法

週1日の割合で保育者の一人としてクラスに入って参加観察を行ない、子どもが他者に「みて」「みてて」等と呼びかけた場面をその場で簡単に記録した^{注3)}。そして、担任保育者からその場面について聞いたことや、子どもたちの様子や保育の流れについて聞いたこと、話し合ったことも含め、保育後にフィールドノートを作成した。

先行研究では好きな遊びの時間を中心とした参加観察をしていたが、本研究では園生活の流れや周りの環境とのかかわりもふまえて考察するため、一日の参加観察をした(原則として9:30~17:30。そのうち、午睡のおおよその時間帯は12:30~15:00)。

4. 事例のまとめ方

フィールドノートから提示的呼びかけの記録を取り

出し、事例としてまとめた。その際には、複数回呼びかけた場合や複数の相手に呼びかけた場合も1事例にまとめた。また、その子どもの呼びかけに触発されて他の子どもも呼びかけた場合はその子どもの事例の中にまとめた。なお、今回も「報告したいこと」の事例は省いて考察する(表1はクラス全体での提示的呼びかけの内容と事例数)。このようにまとめた事例の中から、今回はS子の事例を取り上げる。

新たに考察の対象とした指さし的呼びかけについては、S子の記録のみを取り出し、事例としてまとめた。

表1 提示的呼びかけの内容と事例数

提示的呼びかけの内容	事例収集期				計
	1歳児 1-3月	2歳児 4-6月	2歳児 7-9月	2歳児 10-12月	
作ったモノ	7	36	41	62	146
気に入ったモノ	1	11	19	9	40
身につけたモノ	1	6	5	11	23
見つけたモノ		7	2	4	13
自分の名前・マーク			4	1	5
自分の所持品			2		2
面白いこと	6	22	54	45	127
モノを操作すること	2	16	17	19	54
飲食すること	3	3	12	14	32
フリをすること	1	14	8	6	29
体を操作すること	3	2	11	8	24
身の回りのことができること		6	6	4	16
自分の身に起きたこと		2	2	7	11
友達と関わっていること		2	2		4
判断がつかねる事例・その他	2	2	4	2	10
計	26	129	189	192	536

注) 2003年1月から12月までの一年間で収集した事例を4期に分けてまとめている。各期の参加観察日は11日である。「報告したいこと」は省いてまとめている。

III 事例と考察

S子の指さし的呼びかけの事例は24事例収集された。これらの事例を検討すると、大きく分けて「見つけたモノ・気づいたモノ」「絵本・紙芝居の中のモノ」「友達をしていること」の3つの内容に整理することができた(表2参照)。提示的呼びかけの事例は61事例収集され、IIの提示的呼びかけの内容に整理することができた(表3参照)。具体的な事例については表4・表5に簡潔にまとめた。

以下、1年間の園生活の流れを4期に分け、各期で

のS子の指さし呼びかけ、提示的呼びかけの事例数とその内容や相手の変化を検討し、S子が二つの呼びかけにおける〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いにどのように気づいて行ったのか、自己の意識のめばえとも関連させて考察していく。

1. 1歳児クラス1-3月

(指さし呼びかけ10事例、提示的呼びかけ2事例)

1-3月は4期の中で指さし呼びかけの事例が最も多く観察された。「見つけたモノ・気づいたモノ」には、窓から見えたクレーン車(事例1)や保育室に運ばれて来た給食のパン、友達や自分の写真(事例2)等の事例があり、自分が見つけたモノ・気づいたモノへの喜びや驚きを伝えたいという思いが感じられた。また、保育者と絵本を見ている際に、「絵本の中のモノ」を見るように呼びかける姿も観察された(事例3)。自分が興味を持ったこと、心を動かされたことを伝え

表2 S子の指さし呼びかけの内容と事例数

指さし呼びかけの内容	事例収集期間				計
	1歳児 1-3月	2歳児 4-6月	2歳児 7-9月	2歳児 10-12月	
見つけたモノ・気づいたモノ	5	1	1	3	10
絵本・紙芝居の中のモノ	4	4	1	1	10
友達のしていること	1	3			4
計	10	8	2	4	24

表3 S子の提示的呼びかけの内容と事例数

提示的呼びかけの内容	事例収集期間				計
	1歳児 1-3月	2歳児 4-6月	2歳児 7-9月	2歳児 10-12月	
作ったモノ	1		5	8	14
気に入ったモノ	1			2	3
身につけたモノ		1	1	1	3
見つけたモノ					0
自分の名前・マーク					0
自分の所持品					0
面白いこと		2	9	8	19
モノを操作すること		2	2	1	5
飲食すること			2	5	7
フリをすること		1		1	2
体を操作すること			1	2	3
身の回りのことができること				1	1
自分の身に起きたこと			1	1	2
友達と関わっていること		1			1
判断がつかかねる事例・その他			1		1
計	2	7	22	30	61

たい、共感してもらいたいという思いが感じられ、その姿は集団での読み聞かせの場でも観察された(事例4)。「友達のしていること」では、友達の変化(鼻水が出ていること)に気づいて保育者に呼びかけた事例(事例5)があり、その友達への援助も求めている呼びかけと考えられた。これらの呼びかけの相手は、事例2を除くと全て筆者を含めた保育者であった。

また、この事例2では、写真にその姿を見つけたM男に呼びかけて気づいてもらえなかったS子が、自分の写真を見つけた時にそばで一緒に見ていた筆者に「みて」と呼びかけた。岩田はこれまでの様々な発達研究を自己の成り立ちを柱にまとめて考察した中で、「自分で自分を対象としてながめられるということは、その自己(自分が見ている自己)を他者も対象としてみていることが分かるということでもあり、「そこに、他者からのまなざしにさらされているという自己意識が生まれてくる」¹³⁾と指摘している。この指摘をふまえると、この事例2の頃にはS子の中に自己の意識がめばえ始めていたと考えられる。

一方、この時期に観察された提示的呼びかけの事例は、「気に入ったモノ」を筆者に見せた事例6と「作ったモノ」を友達に見せた事例7のみであった。事例6では、絵本を手を持って見せて「提示の関係」にはなっているが、「みて! ぞうさん!」と呼びかけており、S子の中では「絵本の中のモノ」を「みて」と呼びかける指さし呼びかけ(事例3、事例4)と違いがないように思われた。しかし、自己の意識のめばえが窺えた事例2と同じ日(3月5日)に観察された事例7では、「こんなモノを作った」という喜び・満足感を一緒に粘土で遊ぶ友達に伝えたい、「こんなモノを作った〔私〕」を見てほしいという思いが感じられた。事例6の頃にはS子の中で二つの呼びかけにおける〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いについてはまだ曖昧であった可能性があるが、自己の意識のめばえが窺えた事例7の頃にははっきりしてきたと考えられる。

2. 2歳児クラス4-6月

(指さし呼びかけ8事例、提示的呼びかけ7事例)

この時期も、指さし呼びかけでは「絵本・紙芝居の中のモノ」に対して1-3月と同じ4事例が観察され、やはり自分が興味を持ったこと、心を動かされたことを伝えたい、共感してもらいたいという思いが感じられた。また、「友達のしていること」では、友達が面白がっていることをS子は「いけないこと」ととらえて保育者に呼びかける事例が3事例あり(事

例8)、保育者にその友達への対応をしてもらいたいという思いが感じられた。「見つけたモノ・気づいたモノ」では、給食時に筆者の茶碗の柄を見るように呼びかけた事例が1事例あった。同じはずと思っていた柄が違うことに気づき、その驚きを知らせたいという思いが感じられた。

この時期、提示的呼びかけには大きな変化が見られた。その最初の頃(4月)に新たな内容として「身につけたモノ」(事例9)の事例が観察された後は、自分の行為を見せようとする内容が現れ始めて事例数が増えただけでなく、S子の「こんなことをしている〔私〕」を見せたいという思いが感じ取れるようになったのである。事例10の「モノを操作すること」^{註4)}の紙テープのついた棒は、この時期の風の心地よさを感じられるように保育者が用意したモノであるが、テープが揺れる楽しさを伝えたいだけでなく、「こんなことをしている〔私〕」を見せたいという思いも感じられた。そして事例11では、友達と手をつないで笑顔で

歩き回りながら「みて！」と筆者達に呼びかけ、「こんなことをしている〔私〕」を見てもらいたいという思いをはっきりと感じ取ることができた。事例12でも、生活の中で普段と違うことに面白さを見出し、「こんな面白いことをしている〔私〕」を見せたいという思いが感じられた。

岩田は「対象としての自己性が認識されてくると、それともなうって行為者としての自己の自覚化がなされるようになってくる」¹⁴⁾とも指摘しているが、2歳を迎える頃(3月)から自己の意識がめばえてきたS子は、この4-6月の時期に園生活の中で様々なことに取り組み、「こんなことをしている〔私〕」を実感する経験を重ね、さらに自己の意識がはっきりしてきたのだろう。そして事例13(5月末)では予め呼びかけて「眠ったフリをすること」を見せようとするまでになり、この頃には二つの呼びかけにおける〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いを意識した上で呼びかけていると考えられた。

表4 S子の指さし的呼びかけの事例

【事例1】1月22日(1歳10ヶ月) 読み聞かせの前 <u>見つけたモノ・気づいたモノ</u>	S子は保育室の窓からクレーン車が見えるのに気づき、「みてー！」と指さして私に言う。
【事例2】3月5日(1歳11ヶ月) 午睡前 <u>見つけたモノ・気づいたモノ</u>	b先生が子ども達に絵本を読み始めるが、Ma男、Ta男、S子は壁に貼ってあるクラスの集合写真の方へ行く。 S子は写真の中にMa男を見つけたらしく、「Maくん、みてー！」と声をかけるが、Ma男は応えない。S子は私が側で見ているのをチラッと見て、写真の中の自分を見つけた時に「みてー、Sちゃん！」と言って写真を指さす。
【事例3】3月15日(1歳11ヶ月) 遊び <u>絵本・紙芝居の中のモノ</u>	S子が絵本を読んでというので一緒に読む。『ぞうさんとねずみくん』では、「みてー」「りんご」とりんごを指さす。『あのやまこえてかわこえて』では、「みてー、びかびかしよう」と、はぶらしを指さす。『こっこさんのおみせ』では、「みてー、せなか」と後姿のこっこさんを指さす。
【事例4】3月5日(1歳11ヶ月) おやつ後 <u>絵本・紙芝居の中のモノ</u>	c先生が子どもたちに『ぐりとぐら』の大型絵本を読んでいる時、S子は絵本の中の大きなカステラの絵を指さして「みてー！」と側に座っていた私に言う。
【事例5】3月5日(1歳11ヶ月) 給食 <u>友達のしていること</u>	席についたS子が私に「みてー、Maくん」と言う。側に行き、一瞬何のことかわからず見ていると、S子は同じテーブルのMa男を指さして「はな」と言う。私はMa男が鼻水が出ているのに気づき、「おはなふこう」と言って鼻水をティッシュでとる。
【事例8】4月30日(2歳1ヶ月) 遊び <u>友達のしていること</u>	a先生の膝の上にいるS子は、「***みてー」とa先生に何度も言う。a先生は近くのままごとコーナーの棚に体を突っ込み遊んでいるM子とP子に気づき、「いつも危ないこと教えてくれるねー」とS子に言い、二人のところへ行く。 (**は聞き取れなかった部分)
【事例19】8月20日(2歳5ヶ月) 午睡後 <u>絵本・紙芝居の中のモノ</u>	S子は絵本『ねずみのいえさがし』を手にとり、側にいたN子に「みよ」と言う。N子は「そっと(めくって)」と言う。R子も見ようとする二人は「だめ」と言い、二人で見始める。S子は絵本のねずみをうれしそうに指さし「みてー、ねずみ！」と言う。
【事例20】12月3日(2歳8ヶ月) 遊び <u>見つけたモノ・気づいたモノ</u>	テーブルでS子、K男、A男が絵を描いていたのを私がそばで見ている時、S子は窓の外に月が見えているのに気づいて指さして「みてー、おひさま」と言う。それを聞いたK男は窓の外を見て「しろいおつきさま」とS子に言う。

表5 S子の提示的呼びかけの事例

【事例6】 1月15日 (1歳9ヶ月) 遊び <u>気に入ったモノ</u>	絵本棚の前のカーベットに座り、私とJ子が絵本『ぞうくんのさんぼ』を読んでいると、S子がやってきて座り、絵本を横からとって自分で眺め始める。J子は私の顔をじっと見つめる。私は迷いながらも、笑顔で絵本を手にするS子に返してもらうことは難しそうだと判断し、J子に「別の本読もうか」と話して、J子が持ってきた絵本と一緒に読み始める。 その横で、S子は絵本を持ち上げて見せ、「みて！ぞうさん！」と言う。
【事例7】 3月5日 (1歳11ヶ月) 遊び <u>作ったモノ</u>	テーブルの周りに、A男、H男、J子、P子、S子らが座り、粘土で遊んでいた時のこと。S子は「みて二、へび」と、粘土を細長くしたモノを差し出し、周りの子どもたちに見せる。A男も作ったモノを「みて一」と言って見せる。
【事例9】 4月30日 (2歳1ヶ月) 遊び <u>身に着けたモノ</u>	朝、私が保育室に入ると、子どもたちが話しかけてくる。 S子はままごととコーナーで遊んでいたが、私とその隣の畳コーナーに座って子どもたちの様子を見ている所に来てままごとのお鍋を見せたりした後、自分のTシャツを指さして「みて」と言う。Tシャツの胸についているキャラクターのパッチリした目を指さして「おめめ！」とも言う。
【事例10】 4月30日 (2歳1ヶ月) 遊び <u>モノを操作すること</u>	園庭で広告紙で作った棒に紙テープをつけたものをa先生からもらい、紙テープが揺れるのを面白がって遊ぶ。 S子は園庭の小さな山の上に立ち、棒を振りながら紙テープを揺らし、「みてみて二」と担任の代わりに入った保育者に呼びかける。
【事例11】 4月30日 (2歳1ヶ月) 遊び <u>友達と関わっていること</u>	N子、S子、I子が手をつなぎ (S子が中央)、笑顔で保育室内を歩いている。時々走っているのでa先生が走ると危ないよと声をかけるが、ずっと歩いて回る。a先生も私も他の子どもたちと遊びながらもその様子を興味深く見守る。 途中手をつないだまま転んでしまうが、起き上がるるとまた笑顔で手をつないで歩いている。その時、S子は「みて一」と私たちに呼びかける。
【事例12】 5月7日 (2歳1ヶ月) 着替え <u>面白いこと</u>	着替えを入れたカゴがある棚の前で、S子はビニール袋 (洗濯物を入れる袋) を顔にあて、そばにいたM子、B子、私に笑顔で「みて一」と言う。 (普段はスーパーの袋等を持ってくるのだが、この日は忘れたのか透明のビニール袋を保育者が用意らしい)
【事例13】 5月28日 (2歳2ヶ月) 遊び <u>フリをすること</u>	S子は「せんせい、みて」と私に言い、ままごととコーナーにある人形のベッドに登ってひざまづいて座り、その隣にある棚にもたれて微笑みながら眠るフリをする。
【事例14】 7月2日 (2歳3ヶ月) 遊び <u>体を操作すること</u>	S子は2階のベランダのフェンスにつかまり、片足を上げた状態で、私に「みて二」と言う。
【事例15】 7月2日 (2歳3ヶ月) 給食 <u>飲食すること</u>	S子はフォークでご飯をとり、隣の私に見せて「みて二」と言う。そして、食べる。私が「パクッて上手に食べれたねー」と言うと、満足そうに笑う。
【事例16】 7月16日 (2歳3ヶ月) 着替え <u>自分の身に起きたこと</u>	着替えのカゴから出したズボンを床に広げたS子が、私に「みて」と言う。そして、「ぬれとう」と言う。 (濡れたタオルと一緒に着替えのカゴに入れ、ズボンが濡れてしまったらしい)
【事例17】 7月16日 (2歳3ヶ月) 給食 <u>面白いこと</u>	食事を済ませた後、S子は椅子に座ったまま私の膝に足を伸ばし、「せんせい、みて」と言う。そして、今度は椅子から立ち、口ふき用のタオルを二つに折って椅子の背もたれにかけて「みて」と言い、手品のように手を広げ「ジャン！」と言う。最後には「みて」「くるくる」とタオルを丸め、「ごちそうさまでした」と言って自分の棚に持っていく。
【事例18】 8月26日 (2歳5ヶ月) 給食 <u>飲食すること</u>	S子はR子に「みよつて」と言うと、両手でスープのお椀を持って飲んで見せる。R子はその様子をじっと見る。S子はしばらくそうやって見せていたようで、その後も二人ともお椀を両手で持ち、互いを見ながらニコニコしてスープを飲んでいる。
【事例21】 12月10日 (2歳8ヶ月) 着替え <u>身の回りのことができること</u>	S子は脱いだズボンを床に広げてたたみながら、そばにいたa先生に「みて」と言う。

また、指さし的呼びかけ、提示的呼びかけ（事例12）とも、友達もその場にいた事例が各1事例含まれてはいたが、その相手は、全て筆者を含めた保育者であり、友達よりも保育者に見てもらいたいという思いが強いことがわかる。

3. 2歳児クラス7-9月

（指さし的呼びかけ2事例 提示的呼びかけ22事例）

この時期、提示的呼びかけはさらに増えて行った。中でも「面白いこと」の事例が増え（9事例）、「面白いこと」を見出して見せるだけでなく、自ら作り出して見せようとするようにもなった（事例17）^{#5}。「作ったモノ」の事例も増え（5事例）、保育者に援助してもらいながらも粘土や積み木等で自分なりに作り上げる喜びを味わうようになり、「こんなモノを作った〔私〕」を見てもらいたいという思いも強くなったためと思われる。また、給食をきちんと食べること、お碗やフォークをきちんと持つことを見せようとする「飲食すること」や、「体を操作すること」という新たな内容も観察され（事例14、15）、これらの呼びかけには「こんなことができる〔私〕」を見せたいという思いも感じられた。そして、保育者が呼びかけに答え、ほめてもらったり共感してもらったりすることで、S子はより「こんなことができる〔私〕」を感じ、その喜びを味わっているようであった。他には、困っている状態を見てもらうよう呼びかけて「自分の身に起きたこと」を知らせる事例もあった（事例16）。

提示的呼びかけの相手は、友達である事例が22事例中5事例見られ（保育者と複数でいる場合も含む）、友達と互いに呼びかけ合って楽しむ姿も見られるようになった（事例18）。S子の友達への関心の深まりが窺える。岩田は、子どもが「自分なりの行動目標をもち、それができる有能な自分を他者に誇らしげに示したり、承認させようとする」ことは、「他者に誇ろうとするほどの〈わたし〉が誕生してきたことを物語るものであり、「このような感情が生成される基底には、他者からみられる自分、他者と比べてみる自分意識（自意識）の発達がある」¹⁵⁾とも指摘している。S子の「こんなことができる〔私〕」への喜びの基底となる「他者と比べてみる自分意識」を育てる〔他者〕としても、友達の存在が少しずつ大きくなって行ったと考えることができる。

一方、指さし的呼びかけは減っているが、「面白いこと」を見せようとするようになったS子が、友達が見ている「面白いこと」についても理解できるように

なり、4-6月の指さし的呼びかけに特徴的であった「いけないこと」をしているととらえた友達を見るよう呼びかける事例が観察されなくなったことが理由の一つとして挙げられる。その他に、指さし的呼びかけをしながら絵本を保育者と楽しむことが以前よりは減り、友達と楽しむ姿が観察されるようになった（事例19）ことも、理由の一つとして挙げられるだろう。

4. 2歳児クラス10-12月

（指さし的呼びかけ4事例、提示的呼びかけ30事例）

この時期も、指さし的呼びかけは少なく、「絵本の中のモノ」が1事例、「見つけたモノ・気づいたモノ」が3事例であった。「見つけたモノ・気づいたモノ」のうち1事例では、保育者もその場にいたが、友達がその呼びかけに気づいてS子に答えていた（事例20）。

提示的呼びかけでは、新たに「身の回りのことができること」を見せる事例が観察され（事例21）、「飲食すること」（5事例）の事例も増えた。これらの呼びかけには、やはり「こんなことができる〔私〕」を見せたいという思いが感じられた。また、呼びかけの相手が友達のみである事例が30事例中5事例となり、S子にとっての〔他者〕として、さらに友達の存在が大きくなったことが窺える。

IV 総合的考察

1. 二つの呼びかけにおける〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いへの気づきと自己の意識のめばえ

本稿では、S子の指さし的呼びかけ、提示的呼びかけの事例数とその内容や相手の変化について、1年間の園生活の流れを4期に分けて検討し、二つの呼びかけにおける他者との位置関係の違いへの気づきについて、自己の意識のめばえとも関連させて考察してきた。

1-3月の時期、S子は気づいたモノ、見つけたモノ、興味を持ったり心が動かされるモノがあると保育者に呼びかけ、共に見てもらうことで驚きや喜びがより増していることが感じられた。そして、一人で見ている時よりも「それを見ている〔私〕」をより実感しているようであった。また、当初はS子の中で二つの呼びかけにおける〔私〕と〔他者〕の位置関係はまだ曖昧のようであったが、「自分で自分を対象としてながめられる」（事例2）ようになり、自己の意識のめばえが窺えた2歳を迎える頃（3月）には、その違いに気づき始めたと考えられた（事例7）。

その後、4-6月の時期には、園生活の中で様々なことに取り組み、「こんなことをする〔私〕」を実感する経験を重ねる中で、さらに自己の意識がはっきりしてきて、その〔私〕を見てもらう喜びを味わうようになっていったと考えられた。そして、他者と共に見て「それを見ている〔私〕」を実感する経験、他者に見てもらい「他者からのまなざしにさらされている」ことを意識する経験を重ねる中で、事例13の頃(5月末)には二つの呼びかけにおける〔私〕と〔他者〕の位置関係の違いについても気づいていると考えられた。

そして、7-9月の頃からは、友達への関心も深まり、友達同士で思いを受け止め合うことができるようになって行き、友達が呼びかけに応じてくれることも増えて行った(事例18、19、20)。それまでは、呼びかける相手はそのほとんどが保育者であったが、この頃からS子にとっての〔他者〕の中で友達の存在が大きくなって行ったことが窺え、そのことが「こんなことができる〔私〕」を実感し、見せたいという思いが生まれる基底となる「他者と比べてみる自分意識」を育てる一因にもなったと考えられた。

2. 自己の意識の育ちを支える保育者の援助

これまでの筆者の研究において、子どもの提示的呼びかけを保育者がきちんと受け止めて誠実に対応し、見せたいモノや行為を見守り、見てもらう喜びを十分に味わえるように援助していくことの大切さ、保育者が「どのような自分を見てくれる人か」が子どもの自己の意識の育ちに大きな影響を与えること等について考察してきたが、今回S子の事例について指さし的呼びかけも合わせて検討したことで、「他者からのまなざしにさらされている」ことを意識するようになる前の時期に、「並ぶ関係」の中で「それを見ている〔私〕」を実感することも自己の意識の育ちの上で大切な経験であると確認することができた。

やまだは、従来は対面的なコミュニケーション、たとえば「目と目を見あう eye to eye contact」行動などの重要性が強調されてきたが、指さしに代表される「並ぶ関係」のコミュニケーションにもっと目を向けていかねばならないと指摘している。そして、幼い時の「私と母の関係」を大学生にイメージして描いてもらった絵には、対面姿勢(話しあう、抱きあう、見つめあう、対面して何かをするなど)よりも圧倒的に並ぶ関係(手をつないで歩く、並んで何かを見る、並んで何かをするなど)で描かれることが多かったことも挙げ、こ

のコミュニケーションを「同じ場所に共存し、共に同じものを眺めることで、ふれあうコミュニケーションだといえるだろう」と述べている¹⁶⁾。保育の中でも、もっと子どもたちと「並ぶ関係」を楽しむための援助が重視されることが必要ではないだろうか。

S子の指さし的呼びかけの事例には、当初「絵本・紙芝居の中のモノ」、特に「絵本の中のモノ」が多く、保育者と一緒に絵本を見る場面はもちろん、集団での読み聞かせの場面でも観察された。子どもにとって、絵本は特に保育者と一緒に絵を見て楽しむ中で心が動かされることが多く、まさに「同じ場所に共存し、共に同じものを眺めることで、ふれあうコミュニケーション」を作り出すモノであり、「並ぶ関係」を楽しむための援助を考える上でも大切にされるべき文化財と言える。特に1歳児クラス、2歳児クラスでは、複数担任で保育をするよさを生かし、一人の保育者が読み聞かせをする時に、他の保育者も子どもたちと一緒に楽しむことは、子どもたちに「並ぶ関係」の心地よさ、楽しさを実感する経験を保障する援助にもなっていく。

また、S子の事例でも、その当初は保育者に呼びかけることがほとんどであり、子どもにとって呼びかけに応じてくれる〔他者〕として、提示的呼びかけと同様、指さし的呼びかけに対してもまず保育者が誠実に受け止め対応していくことが求められる。1歳児クラス、2歳児クラスの頃の子どもの指さし的呼びかけは、指さしを伴っている場合でもわかりにくいことが多く、S子の「見つけたモノ・気づいたモノ」「友達のしていること」の事例でも、すぐにその意図がわからないことがあった。また、それぞれ自分の思いを伝えたい子どもたちに囲まれて、十分に対応できないこともあった。しかし、そのような中でも保育者が日々の園生活の中で子どもからの呼びかけに敏感であり、誠実に受け止め、子どもたちが「並ぶ関係」にある喜びを味わいながら「それを見ている〔私〕」を実感できる経験を保障していくことが大切な援助となる。そして、日頃からそのような姿勢で子どもたちと接する保育者の姿を見せること自体が、同じ場で生活している周りの子どもたちをその育ちに合わせて「並ぶ関係」に引き込んで行くための援助にもなっていく。

子どもたちの自己の意識の育ちを支える保育者の援助として、以上のような視点をもって園生活を共にしていくことが大切であることを、S子の事例を通して考察することができた。

注

- 1) 対象児には、事例収集開始時に言葉が出てなかった2名は除き、事例収集期間の最後の1ヶ月を残して退所した2名は含めた。事例中の○男は男児、○子は女児を表し、4月生まれから順にA男からS子までアルファベットで表記する。他の子どもについては、T a男等、アルファベットを組み合わせて表記する。
- 2) 各期の日数を同じにするため、7-9月には10月1日も含めた。一日の園生活の流れや一人ひとりの子どもを理解するため、2002年11-12月にも計8日の参加観察を行なった。
- 3) 「みよって」「みとって」(この地域の方言)と呼びかけることもあったが、「みてて」と同じ意味ととらえた。
- 4) 体の操作はモノの操作を伴う場合があったが、その場合は意識が体の操作により向いていると思われる事例を「体を操作すること」、モノの操作により向いていると思われる事例を「モノを操作すること」とした。
- 5) この頃から、S子だけでなく、対象とした子どもたちは「面白いこと」を見出すだけでなく、自分でも作り出して他者に見せようとしたり、他者を真似して自分も見せようとする姿がよく見られるようになった(表1参照)。そして、他の内容と比べると、その相手が友達である場合が多いことも特徴的であった(54事例中11事例)。

引用文献

- 1) 福崎淳子「幼稚園新入3歳児の遊び場面における『みてて』発話」『保育の実践と研究』第5巻第2号 pp.42-59 2000
- 2) 福崎淳子「『みてて』発話からとらえる幼児の他者意識—見せたい相手はだれか—」『保育学研究』第40巻第1号 pp.83-90 2002
- 3) 福崎淳子「幼児の『みてて』発話—見せようとしているモノは何?—」『保育の実践と研究』第8巻第2号 pp.47-55 2003
- 4) やまだようこ『ことばの前のことば—ことばが生まれ

- るすじみち1—』p.158 新曜社 1987
- 5) 前掲書4) p.149
 - 6) 同上 p.148
 - 7) 阿部和子『子どもの心の育ち—0歳から3歳—』p.199 萌文書林 1999
 - 8) 阿部和子『乳幼児期の「心の教育」を考える—かわりの中から見えてくる「自己」の育つみちすじ—』pp.195-196 フレーベル館 2001
 - 9) 前掲書7) p.163
 - 10) 友定啓子『幼児の笑いと発達』pp.126-127 勁草書房 1993
 - 11) 拙稿「子どもの提示的呼びかけについての一考察—保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から—」『西南女学院短期大学研究紀要』第50号 pp.29-41 2004
拙稿「子どもの提示的呼びかけについての一考察—保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から—(2)」『西南女学院大学紀要』第9号 pp.206-215 2005
 - 12) 拙稿「子どもが他者に見せたい自分についての一考察—保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から—」『保育学研究』第43巻第2号 pp.21-33 2005
拙稿「子どもの提示的呼びかけについての一考察(3)—保育所1・2歳児クラスの二人の子どもの事例をもとに—」『西南女学院大学紀要』第10号 pp.165-174 2006
 - 13) 岩田純一『<わたし>の世界の成り立ち』p.76 金子書房 1998
 - 14) 同上 p.85
 - 15) 同上 pp.104-105
 - 16) やまだ 前掲書4) pp.158-159

謝辞

参加観察に協力して下さった保育所の子どもたちと先生方に感謝申し上げます。

付記

本稿は日本保育学会第59回大会における発表について大幅に加筆修正を加えたものである。

A Study of Childrens' Calling-for-attention Behaviors: Focusing on a Girl's Being Aware of Relationship to Others and Her Self-Consciousness

Hisako Nakashima

<Abstract>

The author conducted participant observations in one- to two-year-old nursery classes for a year, collecting cases of childrens' "calling-for-attention behaviors".

In this study, I took cases of a girl, and considered how appeared these behaviors, focusing on two types; one type when she intended others to join her in giving attention to other things, the other type when she intended to show others some objects or acts.

As a result, many "joint-attention behaviors" were observed at first. Then, after she became two years old, gradually showing behaviors were observed more and more with various contents.

These results suggested that she noticed a difference in her relationship to others between these two types of behavior and developed more self-consciousness.

Key words: calling -for-attention behaviors, nursery, one- to two-year- old classes, self-consciousness, participant observation